谷本馬太郎

たにもと・うまたろう

海軍中将

経　歴			
生:明治19年(1886年)4月20日、広島県福山生まれ			
没:昭和17年(1942年)11月11日、佐世保において病没、享年57歳			
明治37年(1904年)	17歳	広島県立福山中学校(誠之館)卒業	―
明治37年(1904年)12月	18歳	海軍兵学校入校	―
明治40年(1907年)11月20日	20歳	海軍兵学校(第35期)卒業、厳島乗組(海兵卒)	海軍少尉候補生
明治41年(1908年)7月28日	22歳	軍艦明石に乗組　上海に赴任	〃
明治41年(1908年)12月25日	22歳	―	海軍少尉
明治43年(1910年)12月1日	24歳	砲術校普通科学生	海軍中尉
明治44年(1911年)4月20日	25歳	水雷校普通科学生	〃
明治44年(1911年)8月4日	25歳	富士乗組	〃
明治45年(1912年)4月24日	26歳	宗谷乗組	〃
大正2年(1913年)5月24日	27歳	横須賀海兵団附	〃
大正2年(1913年)12月1日	27歳	海大乙種学生	海軍大尉
大正3年(1914年)5月27日	28歳	砲術校高等科学生	〃
大正3年(1914年)12月1日	28歳	春日分隊長	〃
大正5年(1916年)9月1日	30歳	山城分隊長、艤装員	〃
大正5年(1916年)12月1日	30歳	海兵教官、監事	〃
大正7年(1918年)12月1日	32歳	海大甲種学生	〃
大正8年(1919年)12月1日	33歳	―	海軍少佐
大正9年(1920年)12月1日	34歳	1Sd参謀	〃
大正10年(1921年)12月1日	35歳	軍令部参謀	〃
大正11年(1922年)11月1日	36歳	軍令部参謀、海大教官	〃
大正12年(1923年)11月10日	37歳	3S参謀	〃
大正13年(1924年)11月10日	38歳	横鎮附(欧州各国出張)	〃

大正13年(1924年)12月1日	38歳	―	海軍中佐
大正14年(1925年)9月1日	39歳	帰朝	〃
大正14年(1925年)9月10日	39歳	軍令部参謀	〃
大正15年(1926年)11月5日	40歳	軍令部参謀、参本部員	〃
昭和2年(1927年)12月1日	41歳	比叡副長	〃
昭和3年(1928年)11月15日	42歳	海大教官	〃
昭和3年(1928年)12月10日	42歳	―	海軍大佐
昭和5年(1930年)11月1日	44歳	舞鶴要港部参謀長	〃
昭和6年(1931年)12月1日	45歳	由良艦長	〃
昭和7年(1932年)12月1日	46歳	鳥海艦長	〃
昭和8年(1933年)11月15日	47歳	海大教官	〃
昭和9年(1934年)11月15日	48歳	呉鎮参謀長	海軍少将
昭和10年(1935年)11月15日	49歳	8S司令官(第八艦隊)	〃
昭和11年(1936年)12月1日	50歳	11S司令官	〃
昭和12年(1937年)12月1日	51歳	駐満海軍部司令官	〃
昭和13年(1938年)8月1日	52歳	練習艦隊司令官	〃
昭和13年(1938年)11月15日	52歳	―	海軍中将
昭和14年(1939年)4月1日	52歳	軍令部出仕	〃
昭和14年(1939年)11月15日	53歳	第一遣支艦隊(1CF)司令長官	〃
昭和15年(1940年)11月15日	54歳	軍令部出仕	〃
昭和16年(1941年)4月10日	54歳	海南島警備府司令長官	〃
昭和16年(1941年)11月20日	55歳	佐世保鎮守府司令長官	〃
昭和15年(1940年)4月29日	54歳	従二位勲一等旭日大綬章、功一級	―

生い立ちと学業、業績

広島県福山に生まれ、明治37年(1904年)福山中学校卒業。
日露戦争開戦の年である。
2月8日、日露国交断絶を各国に通知、仁川沖で日露海軍が交戦、海軍の先遣艦隊は、旅順口の露国防御施設を夜襲、10日に日露双方それぞれ宣戦布告、21日にはロシア陸相クロパトキンが満州陸軍総司令官に任命され、旅順を主戦場とした海陸の激しい戦闘が10ヵ月にわたって続けられる(乃木将軍率いる第3軍の旅順総攻撃、203高地占領が11月30日)。
将に風雲急を告げる国家存亡のとき、谷本氏は、志を帝国海軍に立てて海軍兵学校への道を選び、難関を突破して12月に入校した。

翌明治38年(1905年)5月27日の日本海海戦、9月5日ポーツマス講和条約の調印と戦後の厳しい状況の中で海軍士官生徒の教育を受け、明治40年(1907年)11月に優秀な成績で兵学校を卒業、少尉候補生として練習艦隊での訓練航海を終えるや、軍艦「明石」乗組を命ぜられ上海に赴任し、海軍少尉に任官した。
明治43年(1910年)12月海軍中尉に昇任すると内地勤務となり、海軍砲術学校、水雷校の学生としての研鑽を経て、艦隊勤務(「富士」「宗谷」乗組の後、大正2年(1913年)海軍大尉となり、海軍大学校乙種学生に採用され6ヶ月、更に砲術学校高等科学生6ヵ月の教育を受けた。
この課程を終了後、軍艦勤務で分隊長を勤めた後、大正5年(1916年)12月から海軍兵学校教官に就任、大正7年(1918年)12月には海軍大学校甲種学生に合格して研鑽を積み、翌年12月には海軍少佐に昇任する。
以後ここから艦隊参謀を振り出しに、佐官時代は、主として軍令部参謀また海軍大学校教官の要職を歴任して、帝国海軍の中枢を歩んだ。

この間、大正13年(1924年)に海軍中佐に任官、1か年間の欧州各国出張も経験、昭和3年(1928年)には海軍大佐に昇任し、舞鶴要港部参謀長、軍艦「由良」「鳥海」の艦長、更に海軍大学校教官を経て、昭和9年(1934年)には海軍少将に栄進し、呉鎮守府参謀長に就任、翌年には第8艦隊司令官となり、以後提督として重責を歴任する。

昭和12年(1937年)7月7日盧溝橋事件が突発し、やがて日中戦争へと戦火は拡大したが、その時、谷本提督は、第11艦隊司令官として中国・漢口方面警備の任にあり、8月に、漢口に集結した居留民全員を麾下の艦船を率いて上海に護送する大任を帯び、下江両岸に中国軍監視兵凝視の中を洋上に出て、長途六百浬を航海、無事上海に到着の快挙は、当時の新聞にも大きく報じられている。

昭和13年(1938年)海軍中将に栄進、第1遣支艦隊司令官として輝かしい武勲をたて、昭和15年(1940年)12月には、東京に帰還、天皇陛下に軍状上奏の光栄に浴した。
次いで海南島警備府司令長官として戦地勤務に帰り、昭和16年(1941年)、日米交渉決裂の危機迫る11月20日付けで佐世保鎮守府司令長官に任命され、東京に帰還、天皇陛下の親任を得て佐世保に着任したのは、奇しくも真珠湾攻撃・日米開戦の12月8日であった。
小林達治(昭和20年卒)

情報・写真提供:村上貞夫氏

関連情報1:『懐古 誠之館時代の思い出』、178頁、「大海令」、村上貞夫、福山誠之館同窓会編刊、昭和58年5月15日
関連情報2:『福山学生会雑誌(95号)』、20頁、「谷本海軍中将を憶う」、岡田倩一、福山学生会事務所編刊、昭和18年8月10日

2005年5月12日更新:本文・関連情報●2005年11月4日更新:関連情報●2006年6月8日更新:タイトル●2007年6月21日更新:関連情報●2008年4月28日更新:経歴●2009年11月24日更新:経歴●2015年12月26日更新:レイアウト・経歴・本文●